

机邊だより

倉橋惣三

○話の仕方 (ブライアント氏)

一、話の目的

先づ教育的話術の目的は何であるかといふことを考へませう。近來は教育上に談話術の必要といふことに就いて、十分注意せられて居ります。然し其の話術を重んずる人々の中には話術の大切な目的と、比較的小さい効能とを混ぜられて居ることが少くありません。學校などで話術に熱心なといふ人が、多くは自然現象の説明に使つて居ります。成る程地理學、動物學、植物學乃至物理學等のこともこれ等の學問の材料を面白、おかしく組み立て、お話しで教へることが出来ます。幼稚園の保姆諸君はわけても、かういふことに上手で

あります。勿論、かういふことは話の使ひ方としては、正當なことで、又有効なことに相違ありません。然しこれは話術の目的の第一義ではありません。

一體話とは何んでせうか。科學の教科書でせうか、地理の説明書でせうか。歴史の入門でせうか。勿論、さうではありません。談話は元來一箇の藝術であります。従つて其の主要なる働きは、藝術的の用法に於いて初めて得られなければならないのであります。彼の演劇は人生の出來事を取扱つて居るものでありますから、これを以つて社會學的學說をも説くことが出来ます。經濟上の原理をも説明することが出来ます。政治をも描き出すことが出来ます。けれども、これだけであつたら演

劇は演劇として詰らないものであります。これと同しく談話を用ゐて子供に知識を興へるだけでは、折角の技術に對して甚だ物足りぬことであります。恰度、かの有名な彫刻像ミローのヴナスを用ゐて解剖學の説明をするやうなものであります。

談話の仕事は美の仕事であります。人生に於ける役目から云へば、喜びを興へ、愉快を供する仕事であります。談話の教育上に於ける正當なる役目も又こゝに存せねばなりません。

私は談話の他の效能を無視するものでは、もとよりありません。たゞ以上述べた此の目的を固く信ずる爲めに、以下この見地から此の問題を考へて見たいと思つてあります。私は再び明瞭に申して置きます。談話は一つの美術的製作であります。兒童に對する其の最大の効用は美の力に訴へて初めて力があります。美を以つて子供の心を

新しき慾求に促して行くのであります。新しき理解に進めて行くのであります。談話を以て眞に子供等を樂しました人はもうそれだけで大きな仕事をして居るのであります。其の話の内容が子供にどれだけの知識を興へたかといふことの外に、これだけで立派な仕事なのであります。子供等の心が生々とする。美しい想像の窓が開く。子供等の世界に色彩が殖ゑて行く。——これだけで談話の最大の目的を遂げたと言はなければならぬのであります。

(ブライアント氏は如上の見地から話の四つの種類、お伽話、意味なし話、自然話、歴史話に就いて自分の考へを述べて居ります。茲にはその意だけを採つて極く粗雑な自由な御紹介をして置きます)。

(イ) お伽話

子供と云へばお伽話は昔からのつきものであり

ますが、ある一部にはこれを古風の弊習と斥けて居る人もあります。實際教育上の立場から云つて効果のあるものでせうか、ないものでせうか。あるとしてもどんな意味に於いてあるのでせうか。

これはよく考へる必要がありまゝ。お伽話にはお伽話の特徴があります。従つて其の利益も其の特徴に依るものです。第一、お伽話は包まれた上覆のもとに真理を供します。真理が上覆に包まれて居るといふことは、人類の子供、即ち野蠻人の知識の持前であります。われわれの子供の知識の持前も又同じであります。道徳の真理や人生のいろいろ詩のやうな上覆ひに包まれて居るのが、即ちお伽話であります。勿論、子供は或る時機の間は、其の上覆だけを知つて、中身を知ることが出来ません。然し真理はかういふ間にも、子供の経験の中に折り込まれて、知らず知らずの間に其の子の本性の一部分となつて行きます。少くも子供の内的生

活の容量が、廣げられ深められて、成長後の爲めに有益なる貯藏となります。第二には子供の想像力がゆたかに養はれて行きます。其の詩的な情趣に養はれて子供の詩的鑑賞力が育つて行きます。狐がどうした狼がどうしたと、云つて居る造りとは、子供にとつては實は大きな文學であります。子供の時に單に科學的や歴史的の事實談のみで育てられたものは、何時文學に對する鑑賞の練習が出来ませうか。即ち一方には徳育、一方には美育、この重要な二方面が知らず知らずの間に出来て來るといふ處に、お伽話の効用があるのであります。尙これは小さいことですが、昔からあるお伽話の類には、流石に簡潔直截な云はひ十分になれた處があつて、新作物の陥り易い、まわりくどい、わかり悪いと云ふやうな弊が少くあります。これまた、子供の爲めに至極適當なる長所であります。

(口) 意味なし話

意味なし話といふのは、内容から云つて意味のない、たゞ面白く、おどけたといふやうな軽いたわいな種類の話であります。これも内容論者から云へば、餘りに無味なくならないものとも見えます。然し心の緩和剤としての効は十分に認めなければなりません。さなきだに、しかつめらしく窮窟になりやすい大人と子供との間に、この種の軽いおどけは、こつた神經に輕ひ電氣の刺戟を與へるやうなものであります。尙且つおどけは常に多少の諷刺の意味を以つて、きゝめある暗示を子供に與へることが出来ます。可笑しくて笑ふ、うち解けた態度の内に、生真面目な態度では與へられないやうな深い了解を促がすことも出来ます。但し諷刺の意味の大過ぎること、及び其れが主になり過ぎるといふことは、無意味話の本來の意味ではないのでありまして、何處までも無意味話の第一義は軽い可笑しさにあります。其の中に智

慧の含まるゝかどうかといふことは、必ず第二義でなければなりません。

(ハ) 自然話

自然話はこの頃の先生方が恐らく一番多く用ゐらるゝ話であります。子供には理解のむづかしい自然の現象を、子供の興味に惹きつける爲めに、自然を生きたものとして、人間の生活のやうに取扱つて行くことは、確かに一つの賢い教授法でありませう。然し前にも述べましたやうに話はどこ迄も教科書ではありません。即ち自然話を以つて自然を教ゆるだけの用に供しやうとするのは、甚だ足りないことであります。動物の生活などを説明するに子供の生活になぞらへて、説明するといふやうな場合も、これが動物の知識を與へやうといふだけのことならば、甚だ物足りぬことであります。即ち自然話は自然を語つて子供の美的感情を養つて行くといふ大きな働きが、出来なければ

ならぬのであります。又一方には自然物に對する同情の養成といふやうのことも出來なければなりません。而してこれ等は自然科學の教科書が與へる處のものととは全く違つたものであります。この、教科書と違つた効果を擧げ得る處に於いて、談話としての自然話の意味も目的もあるのであります。

(二) 歴史話

歴史話の効果もまた、歴史の教科書とは別のものでなければなりません。古い時代の事實を子供に教へるといふよりは、この事實から養はれて行く種族意識の養成が目的であります。愛國心の養成といふのも、詰りこの事でありませす。次には又、子供の英雄崇拜の心を利用して、種々の種類の偉人豪傑の逸話から善と賢とに對する愛慕の念を養ふといふことも、この話の大切な目的であります。以上話の種類に依つて、それ々の目的を異に

します。然し其の何れの談話も第一目的が知識の供給でないことは同一であります。而してこの知識以外の効果を期する爲めには、談話が總べて藝術的の性質のものとして、考へられ、また取扱はれなければならぬことは明かであります。

二 話の仕方

話をするには、先づ話を擇ばなければなりません。即ち聞手に適應するやうな話を選択せなければなりません。處で選擇が出來たならば、次にはどういふ風に話すかといふ、全く方法の問題が起ります。

どういふ風に話をするかといふ問題に答へるには、話の眞の目的から解決されなければなりません。然るに話の眞の目的は前に述べました如く、藝術的の仕事であるとするれば、話をする人もまた藝術家の態度を持たなければなりません。それならば藝術家の態度を以て話をするといふ爲めに

は、どういふ秘訣を要するか、私はこれに答へて「談話者は先づ其の談話に感じなければならぬ」と云ひ度いのであります。苟も藝術的の仕事であるならば、其の思想及び情緒の大小に拘らず、先づ自らこれを十分に感じて居る人でなければ、他へ傳ふることが出来ません。如何に小さい話であつてもこれが成功する爲めには、自ら十分感じて居なければ出来るものではありません。

然らば此の秘訣を完ふする爲めには、實際上にどういふ、心掛けを要するかといふに、それには積極消極の二つの心掛けが要ると思ひます。積極的には諸君の感情を習練して、總ての談話に十分の感じを持ち得るやうにすること、消極的には自ら感ぜざる話は決してしないといふことであります。この第一の方の、習練に依つて感情を養つて行くといふことの、必要は詳説を要しません。第二の點に就いては恰度私の失策が好い教戒とな

ります。嘗て私の友人が或る話をして、非常に成功しました。聴衆は面白さに酔ふて、賑やかに笑いついででありました。然しどういふ譚か私には少しも可笑しくも面白くもなかつたのであります。けれども其の友人は自分の成功に基つて、私にも其の談話をすることを勧めました。そこで私は十分にその話を研究して或る場所で、試みて見ました。聴衆は多少うけてくれました。又静かな笑も一二度は起りました。けれども、どうも興味の頂點に到ることは出来ませんでした。勿論全然失敗といふのはありませんし、私は又、いろいろの工夫をして、もう一度その話を試みました。然し聴衆を興味の頂點に導き得ることは、前と同じでありました。私はもの足りないまゝで、其の話を暫く捨て、置きました。程経て後、或る時ふと其の話を思ひ出して、再び讀んで見ました。すると今まで氣の附かなかつた面白みが突然に判

りました。即ち言ひ換れば、この時初めて私は其の話を感じたのであります。それから後、私はこの話をする度に前の友人の場合と同じやうに成功を必ず得るやうになりました。その話そのものは、詰らないやさしい話なのですが、談話者自ら感ずることの有無に依つて、かうも聴衆に與ふる力の大小があるかといふことを、自分で驚いたのであります。元來、話手と聞き手との間には、強い暗示的作用が働いて居るものであります。この心理的作用なしに話手が聞き手を魅するといふことは到底出来ないであります。聴衆の感動といふことは、云ふに云はれぬ微細なる心理状態ではあります、その原動力となるものは話手の方にありますのであります。自ら強き心の力を有せざるものは、他の人の心に影響を與へるといふことは、不可能であります。

扱て以上は話方の、言はれ根柢であります。然

し話も一の術であつて見れば、そこに幾つかの技術といふものもなければなりません。

(イ) 其の第一は先づ語らんとする話を、知ることでありませぬ。話をして居る途中で人の名や場所の名を忘れたり前後の關係が曖昧になつて、自ら語調のと切れを生ずるといふやうなことは、言ふ迄もなく話の力をそぐことが大であります。其の話を自ら知ることの覺束かないと云ふことは、聴手に絶えず何處となく不安の感じを起さして、遂に深い興味に誘い入れることは出来ませぬ。第一話の要點を捕捉して居なければならぬ。第二總へての發展が自分のものになつて居なければならぬ。即ち語る時には一々の話が自然に語り手の口から溢れ出るといふ位でなければ、到底話が生きて來ませぬ。處でこの、一の話を我がものにするといふことは、單に記憶暗誦を以つて得らるべきものではありません。一般に暗誦は自在を缺き自然を缺

くもので、形を得て心を得ぬといふやうな弊があります。私のいふ話を知れよといふことは、話の主意を知れよといふことであります。個々の言葉遣の如きは全く其の時／＼自由に作り變へていい筈のものであります。勿論話の中には一字一句原文の通りにした方がよい個所も折／＼はあります。然しさういふ特別の場合を除いては、話は話手の言葉で話していいものであります。二度話せば二度異つた言ひ方をして少しも差支のないものであります。話の要點はしつかりと捕へて居て自在な言ひ方に捌いて行く——これが即ち話を我がものにするといふことであります。

(口次には聴手と話手との位地の關係を適當にする) ことが大切であります。それには子供等が話手の視線の中に、成るべく近く成るべく真直ぐにくるやうにする必要があります。普通に用ゐられて居る半圓の方法は兒童が少數である場合には最も

適當であります。但し此の場合話手は弧の外側に居ないで、内側に居ることが大切であります。又弧の兩端が成るべく遠く離れないことも大切であります。即ち全兒童が残りなく、話手の顔を十分に且つ樂に見ることの出来るやうな位置にあらなければなりません。

(ハ) 話し初めには子供の方を先づ靜かに落ちつけることも必要であります。然しそれと同時に話手の方が十分に氣分を纏めることが必要であります、凡そ話をして居る間は、その室内の全體の空氣がその話の情調に一致して居なければならぬことは、云ふ迄もありませんが、嚴格に云へば話の初まる前から其の情調に適はしい感じを聴衆に與へ置く必要があります。而して此のことの出来る爲めには、自らが話を初める前に、十分其の話の心持ちになつて居なければなりません。例へば春の野の話をするといふ時には、話手の心に明るい

美しい賑やかな春の野の景色があり／＼と見えて来て居なければなりません。話の事件は次から次へと發展して行くにしても、其の背景となる舞臺面の氣分だけは、話し手の心の内に判つきりと、生き／＼と出来て居なければなりません。話し手の方に、この準備がなくて聞き手を其の話の世界の中へ導いて行かうとすることは、到底出来るものではありません。話は無形のものでありますけれども、かういふ意味に於いては、あり／＼とした光景が話の初めから、話し手と聞き手との間に、存して居なければならぬのであります。

＝先づ話を自分のものとし、聴衆を適當に列らべ、自分で氣分を纏めたとして、次には實際に話し方の問題が起ります。私はこれに四つの注意が要ると思ふ。卒直に、簡明に、戲曲的に、而して熱心に、即ちこの五つであります。

卒直、卒直に話せよといふことは、言ひ換れば

自然なれといふことであります。彼の態とらしい、種々の技巧を弄して、殊更らに子供の爲めに聲や態度を造らへて行くと云ふことは、甚だ厭ふべきことであります。第一話をして居る間に、かうした作り聲や造らへごとの出来るといふは、話し手の自己意識の絶えず働いて居るといふ證據でありまして、話術の根本義たる藝術的態度と最も相容れないことであります。のみならず我れを忘れて其の話に聞き惚れるといふ子供の態度と合致し難い態度であります。話し手は宜しく其の内の没頭して自分の技巧などを考へる餘地がないといふ位でなければなりません。先づ自ら其の話の氣分に化せられて、それが自然にあなたの口から出て來るといふのでなければなりません。

既に態度に於いて此の卒直を得れば、言辭の選擇も自然卒直になります。何も話の言葉は殊更らに飾る必要はありません。簡単な平常遣い慣れた

言葉程、聞き手にも話し手にも生きて居るものはありません。言葉も態度も卒直なることが眞の語術の第一要件であります。

簡明、簡明とは詰りまわりくどいことの反対であります。總の事件は特別な必要のない限りは、餘計な説明も形容もしないことであります。子供に、順序さへ亂れなければ簡明が一番理解されるのであります。子供に對する話として、くどくどしい説明や御説法程、無益有害なものはありません。説明した爲めに反つて判らなくなり、御説法をした爲めに反つて力を失ふことは屢々見ることであります。元來話し手は話の作者に比して、餘程都合がよいのであります。作者は言葉だけで事件も印象も明かにして行かなければなりませんから、自然こま／＼と詳しく書かねばなりません。然し話し手には顔の表情もあり言聲もあり、體の

身振りもあり、言葉をすつと省くことが出来ます。作者が二つの動詞を使つて居る處に、話し手は一つで十分であります。作者が三つの形容詞を使つて居ることを、話し手は一つで十分に表はすことが出来ます。それを作者の書いて居る以上にまで説明しなければならぬといふのは、拙の最も拙なるものであります。

戯曲的、戯曲的に話せといふことは誤解され易い言葉であります。殊に卒直簡明といふことは相容れないやうに思はれることがあります。然し少くも私の戯曲的と云ふのは、つくれ、かざれ、たくめ、と云ふやうに技巧的に解されてはなりません。話し手と聞き手との間に白壁を置くな、と云ふことに過ぎません。即ち話し手の筋が始終聴衆に美しい舞台として目に見えるやうであれと云ふことに過ぎません。勿論、話の聲の抑揚、いろ／＼の擬聲、目や手の使ひ分け等も話し手の自然の表出

であれば結構なことでありますが、これをするこ
とが即ち戯曲的に話すと云ふことだと思ふのは大
なる誤りであります。かういふ巧者なことは人に
依つて得て不得手のあるものであります。話を上
手にするといふ爲めに、不得手の人までも強ひて、
こんな真似をするのは大不賛成であります。もと
ゝ藝術の一である話術がそんなうそやこしらへ
ごとで、成功すべき筈はありません。

談話が眞に戯曲的である爲めには、二つの要件
があります。其の一は解剖的なるよりは、暗示的
なれといふことであります。由來、話し手は自ら
話の一部分となつて其の舞臺に登らなければなら
ないものではありません。話し手は聴衆の想像を
呼び起すだけに其の話を描き出せばよいのであり
ます。それが餘りに細に入り詳を盡くして一切を
語らねばならぬと思ひますと、反つて聴衆の想像
を殺して、我點はするが目に浮ばぬと云ふやうな

ことになりま。要件の第二は話の畫面の明瞭な
ること、其の表し方に力のこもつて居ることであ
ります。話の中に出て來る人物などが一人ゝ明
かな性格に區別されなければ聴き手はこれを目に
浮べることは出来ません。又話の決り處々々が強
く印象されなければ、これ又目に見えるやうに想
像するといふ譯にゆきません。詰り聴衆をして話
を聴くのでなく、見るやうにならしめること、こ
れが戯曲的に話すといふ趣意に外なりません。

熱心、これは別に詳しく説くまでもありますま
い。苟くも藝術的の効果を聴衆に與ふるのに、い
い加減な不熱心なことでは出来ません。

これを要するに、話の方法は何も自然の外にこ
しらへた技巧があるといふ譯ではありません。卒
直なれ、潑刺なれ、熱心なれ、つまりこの外にな
いのであります。